

二次元ぷち文庫

山本沙姫

表紙イラストはめたろ

魔法天士

ミラカルシヤーリイ  
EX

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『魔法天士ミラクルシャーリィEX』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔法天士  
ミラカルシヤーリイ  
EX

山本沙姫  
表紙／なゆたろ

# 登場人物紹介

Characters

---

## ランディ

ドジな魔界の少年剣士。

## メルヴィル

色っぽい衣装と体型の女帝。地上侵略を目指している。

## シャーリイ

天界から使わされた戦士たる少女。

青く輝く水の惑星、地球。その宝石のように美しい姿は、実はこの星の一面にすぎない。閉じられた本のページのように、表からは見えない二つの世界が他に存在するのだ。

一つは果てしなく広がる雲の上に点在する島々に、魔法と呼ばれる特殊な能力を持つ者と、獣の耳とシッポを持ち、驚異的な身体能力を有する人々が共存する世界。その名を天界。そしてもう一つは、魔法と巨大な怪物を操る能力を併せ持つ人々が住む灼熱の大地。魔界と呼ばれる世界である。

二つの世界の人々からは、今日我々が知る青き地球は地上界と呼ばれ、古来より触れてはならぬ世界として立ち入る事を禁じられていた。だが、魔界の支配者である女帝メルヴィルは突如として禁を破り、地上界への侵略を開始したのである。彼女の部下によつて操られる巨大怪物の前に、地上人はあまりに無力であった。天界の王ザルツェフはこれを良しとせず、自らも禁を破ると知りつつ地上の人々に対して救いの手を差し伸べる。天界の戦士すなわち天士と、それをサポートする獣人族の忍者を救世主として送り込んだのだ。選ばれし二人の勇者は、まだあどけなさの残る少女であった。しかし強い友情の絆で結ばれた彼女たちは、大いなる力を發揮して地上の民を守り続けている。

そして今日も……。

「もっ、もうじわけございません〜メルヴィルさまあああ。こつ、この次こそは、あ

いつらを必ず、必ず倒してみせます……」

石造りの宮殿の中。真つ赤な絨毯の上で跪き、涙でくちやくちやになつた顔を床に擦りつけるほど深々と頭を下げる者がいる。一五〇センチに満たない小柄な身体に、スカイブルーのノースリーブコートを纏つた幼顔の少年だ。背中に自分の身長ぐらいはある長い剣を背負い、足元は頑丈そうな革のブーツで固められている。この世界での剣士の正装だが、その姿はあまりにみすぼらしい。服はポロボロに破けて、煙突の中にも落ちたかのようにすすけている。それに身体中が擦り傷だらけだ。戦に敗れた惨めな敗北者。しかしみつともない姿を晒していても、つぶらな瞳には次こそは主君の期待に応えようという決意の光に満ち満ちていた。

彼の名はランディ。自らメルヴィル親衛隊長を名乗る、ドジだが忠義に厚い勇敢な剣士だ。生まれも育ちもわからず、物心ついた時にはすでに女帝に仕えていた彼は、巨大な怪物を従えて地上界征服に赴く任務を与えられている。しかしいつもあと一歩のところまで及ばず、宿敵である天界の使者たちの前に敗れ去っているのがあつた。

「……」

黄金で装飾を施された椅子に深く腰をかけ、冷めた目付きで敗北者を見下ろしながら黙つて話を聞く者がいる。頭の上に龍のツノを模した真紅の寶石が付いた紫のティアラを戴せた、新雪のように白い体躯の美女だ。睫毛の長い切れ長の青い目と、鋭角的に引き締ま

った頬のライン。それにスツと通った高い鼻筋から、気丈な性格が窺<sup>うかが</sup>える。背中まで届く長い髪は絹の糸のように軽く柔らかな金髪で、その輝きの眩しきは本物の黄金に引けをとらない。身に纏<sup>まと</sup>っているのは、両サイドに深いスリットの入ったチャイナドレス。紫色の生地と黒いバラ柄の刺繡<sup>ししゅう</sup>が、彼女の肌の白さを引き立たせていて実に美しい。そしてなんと言つても目を引くのが、ドレスの胸元がはち切れそうなほど大きいバストだ。九〇センチを優に越える乳房は、息を吸うだけでゼリーののようにプルプルと揺れるほど柔らかい。それでいて自重で形が崩れる事もなく、瑞々しいスイカのような球形を形作っている。

ノースリーブのドレスからむき出されたなで肩に、細長い両手。紫色のハイヒールを履いた脚は長く、スリットから覗く白い太股にはムチムチと張りがある。前から見ても大きく張り出しているのがわかるヒップは、左右均等に洋梨型の美しい曲線を描いていた。

気高い美しさと、肉感的な艶めかしさを併せ持つ彼女こそ、魔界の民を束ねる支配者、女帝メルヴィルである。地上界を手中に収めるため、冷酷非道な作戦を企てて部下に実行させる恐ろしい侵略者の長。反面、自国の民に対しては海のように深い愛を注ぎ、多くの者が彼女を慕っている。しかし大勢の有能な部下がいるにもかかわらず、地上侵攻という大任を下ジな少年剣士に任せるやり方に反感を持つ家臣も少なくない。それでもなぜか彼女は、彼がケガを治している間以外は他の者に侵略を任せようとはしないのであった。

——たとえ何度失敗しようとも。

「……まったく、学習能力というものがないのお。おぬしは……」

呆れた口調で呼びかけながら立ち上がると、メルヴィルはハイヒールで床をカツカツと鳴らしながら近づいてくる。神経質そうな足音に緊張し、ひれ伏す少年の喉はカラカラに渴き、胸の鼓動が雷鳴の轟きのように激しくなっていた。彼女は部下に対しては非常に寛大で、このドジ剣士など今までどんなミスをしようにも叱責しっせきされるような事はほとんどない。しかし数えきれないほどの連戦連敗を繰り返していれば、いい加減堪忍袋の緒が切れそうなものだ。

(……もう、愛想つかされたらうな……)

忠実なる下僕剣士は、任を解かれる覚悟を決める。いや、それ以上の罰を受ける事も。

「失敗の報告など、ケガを治してからで十分だと、いつも言っておろうが。次の作戦は、わらわ自ら指揮をとる。それまで休んでおるがいい」

しかし目の前で止まった彼女は、優しい目付きで見下ろしながら今回も温かい言葉をかけてくれた。そしてそのまま振り向きもせず、悠々と去っていく。

「メッ、メルヴィルさまあああああ〜」

心酔する女帝の優しさが、傷つき疲れた心と身体に染み込んでいく。どんな時も自分の事を氣遣ってくれる彼女だからこそ、純情な少年剣士は必死になって期待に応えようと戦う事ができるのだ。しかも、次の戦いでは自ら力を貸してくれるというのだから、これほ

ど心強い事はない。劍の腕には絶対の自信があるランディではあるが、魔界の住人でありながら魔法を使うのが苦手なのが弱点だ。それを補うために彼はいつも巨大モンスターを率いて地上界へ攻め込んでいる。しかし魔法で攻撃してくる天士を相手にするには、やはり強力な魔法の使い手がいる方が有利だ。手裏劍や手投げ爆弾といった飛び道具で、遠距離攻撃をしかけてくるネコミミ忍者に対しても同じである。

だが、同時に敬愛する女帝の言葉は彼にとつては心苦しいものでもあった。

(……でも、メルヴィルさまが自らご出陣なされるなんて、それだけおいらが頼りにならないって事なんだよな……)

胸の奥が、キュンと苦しく鳴った気がした。

数日後、地上界のとある街は恐怖と混沌に包まれる。

バサツバサバサバサバサツツツ……。バシユウウツツツツ！

嵐のような突風を巻き起こしながら、翼長五〇メートルを超える真つ赤なコウモリが宙を舞う。そして地上に向けて、口から小豆粒ほどの大きさの火球を雨霰の如く吐き出して街を焼き払っていく。魔界の巨大モンスター、ヒートバットの空襲だ。魔界からの侵略に對抗すべく結成された防衛隊が迎え撃つが、最新鋭の戦車に戦闘機といった彼らの戦力はまるで歯が立たない。市民はなす術もなく、ただ逃げ惑う事しかできない。

「きやーっ!! だっ、誰かあああー」

「おいっ、そこ道空けるおおいっっっ!」

そこかしこから、断末魔の如き叫び声が湧き上がる。

「ははははっ、いいぞおーヒートバット。このまま地上人の造った醜い街など焼き払ってしまえっ!」

巨大コウモリの背中に立ち、腕を組んで偉そうに踏ん返り返った姿勢で高らかに笑う少年がいた。剣士ランディである。キズの癒えた彼は、予定通り敬愛する女帝と共に再び地上界へ攻め込んできたのだ。彼女にいいところを見せようと、いつも以上に張りきっている。「…………ふっ、他愛もない…………」

燃え上がる街を見下ろして、不敵な笑みを浮かべるメルヴェイル。彼女の様子をチラチラと窺うランディの脳裏を、出発前に彼女から聞かされた作戦内容がよぎる。

『よいかランディ。シャーリイとマリアンがあらわれたら、おぬしは派手に暴れて注意を引くのじゃ。その間にわらわが奴らに淫乱化の魔法をかけてやる。地上人が見ている前で、あの天士とメスネコを性の奴隷にしてやるがよい』

邪魔者をただ倒すだけでなく、辱めを受ける姿を守ってきた地上の民に晒す。それは地上人に反抗する気力すら失わせるほどの絶望感をもたらすであろう。異世界を征服するには、その地に住む民の心に恐怖や絶望といった負の感情を広める必要があるのだ。それに

今まで苦汁を飲まされてきた彼にとっては、恨みを晴らす絶好の機会でもある。さらに二人を派遣した天界の王に対しても、精神的なダメージを与える事になるに違いない。次の使者を送る事すらためらわせるほどに。

(……でも、あいつらとエッチな事するなんて……)

彼女たちは忌むべき天界からの使者。それを見下している地上人の前で犯すなど、多感な少年にとつては荷が重い。思いを寄せる女帝がすぐそばにいるとなればなおさらだ。

(メルヴィルさま……おいらにこんな恥ずかしい事させるなんて……ひよつとして、この作戦つてハマばかりしてるおいらへの罰でもあるんだろうか……)

隣で満足げに逃げ惑う地上の民を見下ろす彼女の姿をチラリと見て、ランディは心の中で呟いた。メルヴィルはいつも通りの美しく、そして凛々しい姿ですぐ隣に立っているはずだが、なぜか今日の彼女はいつもと違って見えた。出がけに「淫乱」だの「性の奴隷」だのといった普段絶対口にしなないであろう艶めかしい言葉を聞かされたせいか、肉付きのよい体軀がさらに色っぽく見えてしまっているのだ。いかに生真面目な剣士とはいえ、異性への興味尽きる事のない年頃の少年である。魅惑的な肉体に、肌も露なドレスを纏った美女がいるとあつては心身穏やかでいられるはずがない。たとえそれが、命を捨ててでも守り敬いたい主君であつたとしても。胸の鼓動が激しく高鳴り、股間のまだ包皮に覆われた一物が充血してしまふ。

（なっ、何だよ……これじゃおいら、まるでメルヴィルさまに厭らしい事したがっているみたいじゃないか……）

「……！」

その時、胸の内を悟られたのか彼女が鋭い視線を飛ばしてきた。反射的に前屈みになり、不謹慎に膨らみかけた股間を両手で覆い隠してしまう。だが、下僕の間抜けなポーズを氣にも留めず、メルヴィルはおもむろに口を開いた。

「どうやら来たようじゃ。わらわは雲の中に隠れる。しつかり引きつけておくのじゃぞ」  
毅然とした口調でそう告げると、彼女はまるで手から離れた風船のように音もなくスーッと浮き上がる。そして、いつの間にか上空に垂れ込めていた鉛色の雲の中に姿を消した。淫乱化の魔法は詠唱に時間がかかるらしく、準備が整うまでここに隠れるつもりなのだ。そして、その間の時間を稼ぐのがランディに与えられた使命なのである。

「ええ？ き、来たつて……」

いきなり姿を消した主君に驚かされると共に、まだ敵の姿を捕らえられないランディは大慌てで辺りを見回す。しかし空にも、燃え盛る街の中にもそれらしき姿は見当たらない。「まあえええーつつつ！」

しかし耳を澄ませば、小鳥の囀りのように可愛らしくそれでいて雷鳴の轟きのように力強い叫び声が聞こえてくる。

「これ以上の悪さは許さないのニャアアアア！」

爆竹の破裂のように五月蠅く、そして甲高い女の子の声も聞こえてきた。遙か彼方から、二人の少女が獲物に襲いかかる猛禽の如き勢いで飛んできたのだ。

一人は袖が長い真紅のワンピースを纏い、さらに上から襟の大きな白いベストを着た少女だ。ふつくと丸みを帯びた頬のラインと低めの小さな鼻から、まだあどけなさが感じられている。しかし青い瞳には侵略者を撃退する決意に満ちた力強さが感じられ、キラキラと輝いていた。身長は一四五センチほどの小柄な身体はバストもヒップも小さめで、ウエストの括れも目立たない幼児体型である。しかし同時にそれは、成長期の少女だけが持つ可憐な美しさに満ち満ちていた。肌は雪のように白く、その美しさは魔界の女帝に引けをとらない。背中まで届く長い桃色の髪は黄色いリボンで二本に結わえられており、ウサギの耳のように可愛らしい。そしてリボンが頭上に輝く金の輪のようにも見えて、まるで空を飛ぶ天使のようでもある。

もう一人は細い身体に若草色の忍び装束を纏い、足元を茶色いブーツで固めた少女だ。手足に結びつけた赤い布をムササビの皮膜のように広げ、風に乗って軽々と飛んでいる。外向きに開いた短い茶髪と、クリクリとよく動く大きな茶色の目。そしてふつくとした頬のラインが可愛らしい彼女には、普通の人にはない際立った特徴がある。頭の上にピンと尖った三角耳があり、キュッと引き締まった小振りなヒップには、フサフサの毛に覆わ

れたシッポが生えているのだ。肌の色はオレンジ色がかった健康的な色合いを呈しており、元気で気丈な性格をよくあらわしている。身長はツインテール少女より若干高いが、胸元が網目状になっている忍者服から覗くバストは小振りで、七〇センチを僅かに超えるほどだ。しかし黒いスパッツに覆われた太股共々、無駄な肉のついていない美しいシルエットを形作っていた。

彼女たちこそ魔界軍の地上征服を阻むべく天界から舞い降りた使者、天士シャーリイとくノ一キャットのマリアンなのである。

「あつ！ シャーリイとネコ忍者だつ」

「た……助かった、助かったぞおーっ！」

二人の勇者があらわれると、燃え盛る絶望の街に歓喜の声が津波のように湧き起こった。「むー！ ボクはネコじゃないのニヤ。誇り高き獣人族のくノ一なのだニヤーツ！」

しかし喜ぶ人々に向かって、マリアンは耳の毛とシッポを逆立てて言い放つ。いつも彼女はちゃんと名前で呼んでもらえないのが不満なのだ。

「来たなチビ天士にメスネコめ！ 今日こそ今までの恨み晴らしてやる。覚悟しろ」

巨獣の背に立つ勇ましい少年は、サツと愛用の剣を引き抜いて切っ先を二人に向けて力強く言い放つ。

ブバババババババババツツ！



「ええーい、五月蠅い五月蠅いーっ！」

バオオオーッッッ、ゴフッゴウッ！

子供っぽい少女にバカにされ、ますます頭に血が上った誇り高き剣士は何が何でも彼女を打ち落とそうと必死に追い回す。

「ネコミミ忍法、ミサイルの術なのニヤーッ！」

すると背後から、聞きなれた甲高い声が響く。天士をサポートするくノ一キャットに、いつの間にか後ろを取られていたのだ。長さ五メートルを越える、どう見ても隠し持てないような巨大ミサイルをどこからともなく取り出した彼女は、ヒートバットめがけて投げつけてきた。

ビギイツ！ ドッバアアアーンッ！

断末魔の叫びを上げる暇もなく、赤き巨獣の身体が粉々に砕け散る。しかし背中にいた少年剣士は、咄嗟とつさに飛び上がって難を逃れた。魔法は苦手でも、自分の身体を飛ばせるぐらいの術は使えるのだ。

(し、しまった……メルヴィルさま……)

囷になるはずが逆に囷になっていたシャーリイに引つかかっていたのに気付き、唇を噛み締めるランディ。雲の中からは、まだメルヴィルの魔法が放たれる気配がない。

「……エクスタシーフォース、レベルナインッ！」

バリバリバリリリーツツツ!! バウンツ!

だが作戦失敗を覚悟したその瞬間、凜々しい女性の声と共に雲の中からスイカほどの大きさの桃色の光球が二つ飛び出してきた。天士とくノ一めがけて、大砲のような勢いで一直線に飛んでいく。呪文の詠唱がギリギリで間に合ったのだ。

(やった! 成功だ)

一転して勝機が見えたランディは、指をパチンと鳴らして喜ぶ。

「来たのニヤ、シャーリイ」

「光と風よ、我らの前に渦巻き、邪悪なる力を弾く盾となれ。リフレクション、レベルファイブツツ!」

ブワシイイイインンツツツツツ!

ところが、まるでこの時を待っていたかのようにマリアンが相棒の背後に隠れる。そしてシャーリイが詠唱と共に開いた左手を前に突き出すと、指先から白い光が霧吹きのように噴き出す。そして台風のように渦を巻いて、飛んできた光の弾を雲の中めがけて弾き返した。

ピシヤアツ! バリリリリリーツツツツツ!!!

「ヒイツ! あつ、ああーつつつつつ!!」

落雷の如き轟音と共に鉛色の雲が飛散すると、桃色の光に包まれた肉付きのよい魔界女

帝が姿をあらわす。彼女が放った魔法が、そのまま自身に弾き返されたのだ。

「おあいにくさま、あなたが呪文の詠唱をしていたのには気付いていたわ」

両手を胸元で組んだ偉そうなポーズで、シャーリィが皮肉っぽい口調で言い放つ。

「違うのニャ。ボクがこの耳で聞きつけたのニャー」

自慢のネコミミを指先で撫でながら、マリアンがさらに付け加えた。せつかくの作戦は、彼女たちに筒抜けだったのだ。しかし今はそんな事に構ってられない。魔法を受けたシヨックのせいか、メルヴィルが落下しはじめたのだ。

「メルヴィルさまあああああーつつつつつ！」

ビュウウウーツツツツツ！

落ちゆく主人を救うべく、下僕少年は全速力で後を追う。これまで出した事のない超加速に、小さな身体に碎け散りそうなほどの激痛が走る。それでも彼は止まらない。懸命に追いかけて続けて、ついに地上まであと数メートルのところまで敬愛する女帝の身体を左手でしっかりと抱きしめた。

「ひっ、開け！ 魔界のゲートよっ……り・ルヴァーズッ！」

そして右手に握り締めた剣の切っ先を地面に向けて、空間移動の魔法を詠唱する。間一髪で、二人の前に黒い魔法陣があらわれた。魔界へと通じる入り口である。

「お前ら、覚えていろよおおおーつつつ！」

ズブズブズブズブツツツ……。

いつものように捨てゼリフを残しながら、ランディは魔法陣の中に吸い込まれていった。命がけで救い出した主君と共に。

「どっ、どうすればいいんだ……おいら……」

宮殿に戻ったランディは、とりあえずメルヴィルを寢室のベッドの上に寝かせた。固く目を閉ざし、白い絹のシーツの上に横たわる金髪の女帝。ドレスのスリットから覗く太股の間には手を挟み、激しく身体をくねらせる姿は、まるで尿意を堪えているようだ。主君の見てはいけない恥ずかしい姿を目の当たりにしているようで、少し気が引けてしまう。

「うっ、あつ、はっはあつ……はあつはあつはあつ……」

頬や胸元がほんのりと赤く染まり、口元から艶めかしい吐息が絶え間なく漏れる。まるで熱に浮かされていているかのように。それに全身から滝のような汗が溢れ、湿ったドレスの生地がボディラインをクッキリと映し出すほど柔肌に密着している。

（あ……メルヴィルさま……こんな……）

普段から手足や胸元をむき出しにしたセクシーな衣装を身につけている彼女だが、今はいつも以上に艶めかしい。彼女が苦しそうなのも忘れて、つい見入ってしまいそうだ。

「……い、いけない。すごい汗だ……このままじゃ……」

がない。炎のように熱くなり、ビクビクと暴れはじめる一物をかろうじて残る理性で抑えている。

「はっ、早く……はやくうーランディさまあ……わらわは、気が変になってしまいそうですわあ……」

戸惑う純情剣士の背中を後押しするかのようになり、メルヴィルはますます乱れた姿を曝け出す。親指と小指で肉のスリットを割り広げ、残る二本の指で中をかき回しはじめたのだ。

くちゅっ、くちゅっ、くちゅっくちゅっ……。

「ああつ、こつ、こんな……指などでは……満足できませぬううー」

粘り気のある水音と、悩ましい喘ぎ声が内耳を擦る。まるで催眠術にでもかけるように。気がつけばベッドに上がり、白いズボンをスリりと脱ぎ捨てていた。そして開かれた女帝の股の間に屈みこみ、破裂寸前にまで膨れ上がったペニスの先端を震える秘裂の真ん中にあてがう。真っ赤に熟したイチゴのような亀頭の先割れからは、彼女を求めてすでに透明な粘液を涎のように垂らしていた。そして小さな手で張りのある太股をキュッと掴み、下腹部を前に突き出す。

グチッ!!

「うっ……」

あこがれの女性の秘所を貫いた瞬間、ランディの亀頭に強い衝撃が走る。はじめて訪れたヴァギナの中は、まるで煮溶かした飴のように熱く、そしてドロドロとした粘り気に満ちていた。

「んっ、はっ、ああああーっつっつっつっつ！」

汗ばむ身体をビクンとはね上げ、苦しげな声を上げるメルヴィル。雪のように白い太股の上を、真っ赤な処女の証が雪解け水の川のように流れ落ちていく。

（ええっ!? メッ、メルヴィルさまって……はじめて……）

敬愛する女帝の破瓜を目の当たりにして、従順な少年剣士は激しく動揺する。固く閉ざした瞳が、無言で引き裂かれた股間の痛みを語っているようだ。突き出した腰の動きが一瞬止まる。

「やっ、やめないでくださいまし……もっ、もっ……奥まで……」

ところが、激しい痛みを感じているはずのメルヴィルがウエストに手を回してきて、のしかかる少年の体軀を引き寄せてきた。

ブリュッ……ブズブズブズブズツツツ……。

底なし沼のような肉壺の中に、カチカチにいきり立った男根が沈められていく。

「うっ……こっ、こんなに……んんんっつっつ！」

敏感な男の筋肉を締めつけ、ベタベタと纏わりつく肉襞の感触が徐々に広範囲に広がっ

ていった。先端に続いてエラの下、さらに根元近くまでもが包み込まれる。

（おいら、今……メルヴィルさまと……）

最も敏感な部位を優しく抱かれて、ランディは心の底から感激した。そしてその感覚を永久に刻みつけるかのように、ゆっくりと腰を前後に動かしはじめる。

ズリユツズリユツ、グリユツグリユツ……。

はじめて男を受け入れた肉穴の中を、大蛇のような極太ペニスが粘り気のある水音を立てながら蠢く。下がれば抜けるのを食い止めるように、前進すれば親しみを込めて抱きついてくるように、湿った肉壁が絡みついてくる。その燃えるような熱さと、敏感な皮膚にペタペタと貼りついてくるゼリーののような柔らかさが心地いい。

「すっ、すごい……メルヴィルさまって、こんな……柔らかくて、グジュグジュしてて……」

魂が身体から抜け出して、どこか遠くへ行ってしまうようなほどの夢見心地に、純真な少年剣士は包み込まれていく。まだ膨らみ僅かな喉仏を反らし、半開きにした口から熱に浮かされたような声を上げながら。

グチュグググチャグググググググググググジュツ……。

白く肉付きのよい身体の奥底が、ポコポコと血管が浮いた高熱の肉棒で撫で回される。その快感をより深く膣内に受けたくて、メルヴィルは悶えながら全身を震わせた。柔肌が

水を浴びたように汗でグツシヨリと湿り、大きな水風船のような乳房がピチャピチャと雫を飛ばしながら波打つ。小さく起立した乳首が、遠心力で外向きに円を描くように。その動きを、吸い寄せられるように見つめるランディ。まるで催眠術にでもかかってしまったかのように、まばたき一つできずに目が離せない。

(……なんて、すごい柔らかさなんだ……おいら……もうっ！)

ツブツ

「いひいんっ！　いつ、いきなりいい……でもっ、いいっ！」

金髪女帝の巨乳に、落雷のような衝撃がビリビリと走る。目の前で揺れる桃色の山脈の誘惑に耐えきれず、ランディは小さな口で吸いついてしまったのだ。コリコリと硬くなっている乳首を甘噛み<sup>あまが</sup>みし、少しひび割れた唇で乳輪を揉みながら、乳飲み子のように吸っていく。母に甘えた記憶を持たない心の隙間を埋めたいのか、それともメルヴィルの艶めかしさに惹かれたのか、自分でもわからない。ただ彼女の乳房の柔らかさや暖かさ、それにトクトクと軽やかなリズムを刻む胸の鼓動の響きを求めて、彼はひたすら吸い続ける。そして空いている乳房に手を這<sup>は</sup>わせ、粘土細工に夢中な子供のようにクリクリと握り締めた。細く短い指が、焼きたてのパンケーキのように柔らかな肌に食い込んでいく。

ビリユツ、ビグツビクン！

「わわわわっ！　こっ、こんなに、ビクビクして、んっ、わふうっ!!」

た柔肌の大地が、雨上がりのように湿ってキラキラと輝いている。スツときれいに通った縦一文字のクレヴァスから、桃色の肉襷が微かにはみ出してプルプルと痙攣しているのを見えた。誘っているかのように。

「……」

声を出すのも忘れて見入っていると、再び魔法天士が喋りはじめた。

「お願いです……どっ、どうか……今まで、あなたさまの邪魔をし続けたこの身の程知らずな天士に、その……大きな、オツ、オチン……チンで、罰を、お与え下さいませ……」

たどたどしく言葉を詰まらせながらも、恥ずかしいお願いを言いきる性奴隷のようなシャーリー。まるで本当にエクスタシーフォースにかかってしまったかのようなだ。次々と淫靡な姿を晒す少女天士に、多感な少年剣士はもう抗えない。

「いつ、いくぞっ……シャーリー……」

はじめて彼女を名前で呼ぶと、彼は再びベッドに上がり、粘液を纏った亀頭をピクピクと震える肉のスリットにあてがう。そして李のような可愛らしいヒップを掴んで、華奢な腰をグツと前に突き出した。

グシユツグチュツ……。

「いつ、ああんっ！」

破瓜の瞬間、白い背中を反らして短い悲鳴を上げるシャーリー。彼女のか細い桃の内側

を、赤い処女の雫がタラタラと垂れ落ちていく。

「あつ、ご……ごめん、シャーリー……」

華奢な少女が痛がるのを見て、つい敵である事も忘れて謝ってしまうランディ。そんな彼を氣遣い、シャーリーは精一杯の笑顔を見せる。

「へっ、平気です……痛く、ないです。だから……もつと、もつと奥まで、来て下さい……」  
額に玉の汗を浮かべながら、さらに深く繋がる事を願い出る健気な美少女天士。敬愛する女帝に比べて遥かに小さな体躯の彼女にとって、自分の一物がいかに重荷であるかは容易よういに想像がつく。しかしそれでも寵愛を受けたいがために、身を裂かれるような激痛に耐える姿が胸を打つ。

「……痛く、しないからね……」

普段なら決してかける事のない優しい言葉が、自然と口から出た。そして彼は、ゆつくと腰を前後に振り、まだ固い少女のヴァギナを少しずつ解すように己が分身を送り込んでいく。

グジュツ……ズリュツ……グリユツ……プリユツ……。

ゆつたりとしたテンポで押しでは引き、引いては押しでは狭い産道の中を進んでいく極太のペニス。その脈打つ表皮に纏わりつくシャーリーの膣内の感触は、先に堪能したメルヴイルの中とはかなり違う。身体が小さく未熟なせい、肉壁にはコンニャクのような硬い

弾力があり、軽くパタパタと叩かれています。それに締めつけの具合も、豊満な金髪美女よりも遥かに強く、ちよつとでも動きを止めたら二度と抜けなくなりそうだと錯覚させるほどである。

グチャグチャ、グシユグシユ……。

「あつ、あつ、あつ……んっ、あんっ、すっ、すごおい……ラッ、ランディさまの……オチン、チン……熱くて……太くて……あんっ！」

肉壺の心地よさに加えて、耳に届く少女の淫靡な喘ぎ声がエッセンスとなって、ランディはますます興奮していく。

「おっ、お前だつて……すごいぞ、シャーリイ。ギュツと締まつて……すつごく、気持  
ちいい……」

いつしか抑えが利かなくなり、白いお尻を真つ赤な手形が突くほど強く握り締め、腰の振りを無意識のうちにどんどん早めていた。

ジャグッジャグッグチュグジュジャブジャブ……。

袂が開けられたばかりの少女の秘所から、噴水のように汗と愛液のカクテルが噴き出して、辺り一面に花の蜜のように甘酸っぱい香りを広げていく。

「……もっ、もうっランディさまったらシャーリイばかり……わらわの事、忘れないで欲しいですわぁ……」

ツインテール少女の幼臍に浸っていると、彼女の下ですつと待っていたメルヴィルが尻を上下に振りながら甘ったるい声でおねだりしてきた。

「ええっ、あつ、はいいつ、メルヴィルさまっ！」

ジュボツ！ ジリュツ！

主人に言われて、ランディは咄嗟に一物を突きかえる。強い締めつけから一転して、柔らかな肉壁の中を、いきり立つ一物でグチャグチャにかき回していく。

ジャブツジャブツジュブツジュブツ……。

「やあつ、ランディさまつたら……わたしの事、忘れないでくださいよお……」

しかしメルヴィルに夢中になっていけば、当然ほつたらかきにされたシャーリイがまたおねだりしてくる。彼女の熱意に応えればまた次はメルヴィルがと、熟れた桃を髣髴とさせる肉感的なボディの美女と、未だ青い果実の小柄な少女の花園の中へ、交互に己が分身を突き込んでいくランディ。硬さも締めつける強さも違う二つの肉穴の中で磨かれた一物に、ビリビリと痺れる感触が走りはじめ。二度目の発射の時が近づいているのだ。

ジュンツジュンツ、ビジュパチヨブリユツグリユツ……。

「らっ、ランディさまあ……わらわは、また、イッ、イッてしまいますうううーつつつ  
っ!!!」

豊満女帝の柔らかな膣内をこね回していると、彼女が限界の近づきを告げてきた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**